

平成30年10月8日現在

機関番号：87111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370155

研究課題名(和文)九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental research on sculpture made in China in Kyushu

研究代表者

井形 進 (IGATA, SUSUMU)

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員(移行)

研究者番号：60543684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：九州には中国からの渡来彫刻が偏在している。都に至り日本美術の主流に影響を及ぼした渡来彫刻と、これら九州に偏在するものを比較研究することは、日本美術について考える上で大きな意義をもつ。また九州という場のあり方や、異文化が接触する境界での美術のあり方を明らかにすることにもつながる。そのような研究の基盤を形成するため、九州にある明時代以前の彫刻の調査を行い、基礎資料を集積した。とくに、九州西側にのみ40基程度が存在し、南宋から元時代の制作だと考えられ、5軀の尊像が刻まれた薩摩塔については、集中的に調査して重要作例の制作の時空を絞り込んだ。その成果として、5本の論考を収めた報告書を刊行した。

研究成果の概要(英文)：In order to understand Japanese art we need to study Chinese art. There are many Chinese sculptures in Kyushu, but not much research has been done until now. Kyushu played a major role in the exchange between Japan and China. Studying abundant Chinese sculptures in Kyushu will help to clarify the characteristics of Japanese art, the characteristics of history and culture of Kyushu, and the exchange between Japan and China. Therefore, I investigated Chinese sculptures in Kyushu and collected basic information and pictures. In particular, I studied stone statues such as "Satsuma-to" and Song-dynasty style lion sculptures on the west side of Kyushu. "Satsuma-to" is a stone pagoda in which five Buddha statues are engraved. As a result of this survey, I was able to know when the important "Satsuma-to" and Song style lions were made. I wrote five papers and made a report containing them. This report will be of great help to future research.

研究分野：美術史

キーワード：九州の中国系彫刻 薩摩塔 宋風獅子 大陸美術の受容 境界と美術

1. 研究開始当初の背景

日本の美術は折にふれ大陸の美術から重大な影響を受けてきた。日本の美術を研究する上で、中国や朝鮮半島から渡来した美術作品を研究することは重要である。大陸との交流の窓口であった九州には、大陸渡来の美術作品が多くこのこされている。これらの中で、朝鮮半島で制作された仏像や仏画、また、長崎を源とし、黄檗宗寺院を中心に多くのこる、中国の明時代末期から清時代にかけての仏像や仏画についての調査研究は、早くから進められてきた。しかし、日本の仏像について考える上でより重要な、明時代以前の仏像については、調査も研究も手つかずに近い状態であったと言って過言ではない。九州には、近年の調査研究によって、とくにその西側に、多くの明時代以前に制作や渡来が遡ると考えられる彫刻作品がこのこされていることが、明らかになってきていた。そこでこれらについて、まずはその輪郭を把握し、調書や写真などの基礎的な資料を調べ、そしてそれを広く共有することが必要だと考えられた。それによってようやく、九州ないしは日本における大陸渡来美術の受容の具体相について、今後考察を深化させてゆくための基盤が、整えられるのだと考えたものである。

2. 研究の目的

九州には多くの中国系彫刻がこのこされている。しかし一方で畿内周辺には、渡来した後九州に留まることなく都にまで至って、日本美術の主流と接触して大きな影響を与え、結果として列島に広く影響を及ぼした彫刻作品も存在している。これら、九州でのみ受け容れられて偏在しているものと、都にまで至って、結果として広く影響を及ぼしたものに注目して、これらを比較検討することは、日本の美術の特質を明らかにしてゆく上で、大きな意義をもつと考えられる。日本の彫刻が中国の彫刻の何を受け容れ、何を排除し、それが何によるものなのかを考えることは重要である。またそれは、日本の美術において言わば濾過装置としての役割を果たした九州という場のあり方や、異文化が接触する境界での美術のあり方を浮かび上がらせることにもつながると考えられる。今後これらの課題について具体的に考えてゆく上で、九州に偏在する中国系彫刻、とくにその明時代以前に遡る古例について、その輪郭を把握し、調書や写真などの基礎的な資料を調べることは、必要不可欠な作業である。今回の研究は、そのような必要不可欠な作業を通して、今後の研究深化の基盤を整えることを目的

とした。それにあたっては、九州西側でのみ40基程が確認され、宋時代から元時代にかけての制作であると考えられ、5躯の尊像表現をもった、薩摩塔と称される石塔については、とくに重点的に基礎的な資料を調べるべく考えた。まさに九州に偏在し、数的に見ると中国系彫刻の主流である薩摩塔とそこに刻まれた尊像を考えることを通して、中国系彫刻が九州に偏在する背景にも迫り、もって今後の研究進展の突破口を開くべく考えたものである。

3. 研究の方法

九州にこのこる中国系彫刻について、研究書や地誌の類、自治体の文化財関係者等から所在情報をあつめて集積し、それに基づいて精査を重ねる。調査においては、法量、構造や技法、保存状態についての、詳細な記述をもつ調書を作成し、高精細の写真を撮影する。必要に応じて作品を九州歴史資料館に搬入し、X線CTスキャナや蛍光X線分析装置などの自然科学的な機器や手法を用いて、調書の精度を高める。また九州という場と造形の特性を鮮明にするため、日本の他地方のみならず、中国や朝鮮半島での比較研究も行う。進捗状況に合わせて学会や研究会で報告を行い、さらなる情報収集と軌道修正を図り、また、展示や講座で広く一般への還元と普及を図る。これらを通して最終年度には、成果を報告書にまとめて公刊する。以上のような方針を立てて調査を開始し、概ね全体としては、方針の通りに進めることができたと考えている。研究期間内に中国に調査に行くことこそできなかったものの、中国から研究者を招いてシンポジウムを開催し、その際、またその前後に九州で共に調査を行う中で、むしろ効率的に必要な情報を得ることができた。

4. 研究成果

研究期間を通じて、福岡県域を中心としながら、九州から山口県にかけて所在する中国系彫刻について、調書と写真を集積してゆき、その成果を反映させながら、2014年度には特別展「福岡の神仏の世界 九州北部に華開いた信仰と造形」、2017年度には特別展「霊峰英彦山 神仏と人と自然と」を開催し、これにあわせて館内に搬入した展示作品を自然科学的な機器や手法で分析するなど、調査とその成果の公開、そしてさらなる調査の深化を、有機的に進めてゆくことができた。2017年度には企画展「堅粕薬師と東光院の古仏たち」も開催し、展示資料中の、金鎖甲を彫刻であらわした平安時代後期の十二神将

像について、2014年度の特展でも同様の指摘を行っていたところではあったが、九州においては平安時代後期の作風を基調としながら、細部形状に宋風と理解することが可能な表現を見せるものが、ままた見られることについて、やはり当該期の当地においては、都の作品のみならず、大陸の作品を直接参照することがあったこと、それを是とする場や、参照しうる作例が存在していたことを、あらためて指摘した。また、2016年度は九州歴史資料館と久山町（福岡県糟屋郡）が共同で、国際シンポジウム「中世の福岡平野から見る東アジア 首羅山と造形遺品を中心に」を開催し、とくに薩摩塔や宋風獅子について考察を進め、また中国の研究者の発表やその後の対話で、彼の地の関係資料の存在についての知見を得て、薩摩塔研究に新たな意識をもつことができるなどのこともあった。

なお、研究報告書については、研究開始当初は、集積した調書や写真を網羅的に掲載するべく考えていた。しかし報告書の頁数に鑑みて、研究の要としていた薩摩塔や宋風獅子の基準的な作例について、調書や写真を掲載し、制作の時空を押さえて基準を設定する考察を行うものとした。もって美術史学をはじめとする、史学系諸分野における、今後の研究展開の基盤を提供しようとしたものである。制作の時空を絞り込んで報告書で取り上げたのは、13世紀半ばの制作だと考えられる、福岡県糟屋郡久山町の首羅山遺跡の薩摩塔と宋風獅子、13世紀前半の制作だと考えられる、長崎県平戸市の志々伎神社沖都宮の薩摩塔と宋風獅子、14世紀前半の制作だと考えられる志々伎神社中宮の薩摩塔、そして、宋風獅子の嚆矢であり代表作である、建仁元年（1201）に奉納された福岡県宗像市の宗像大社の宋風獅子、掉尾であると見られてきて、調査研究により14世紀末から15世紀初め頃の制作であると推定できた、山口県長門市の三隅熊野権現社の宋風獅子等である。報告書中において、薩摩塔、宋風獅子共に、始まりと半ばと終わりという、要となる三つの時点を押さえることができたことは、大きな成果であった。今後これを足がかりとして、さらに要となる作例の制作時期を考えながら、研究深化の足場を一つ一つ設けてゆき、それらを通して、薩摩塔や宋風獅子、そして九州に偏在する中国系彫刻の背景や意義についての考察へと進んでゆきたい。なお、三隅熊野権現社の宋風獅子については、応永年間に温州の慶載が奉納したという伝承を伴っており、2016年度に論文を発表した際は、それを肯定的にとらえて紹介していた。そしてその後実際に、2017年度に近く三隅八幡宮において大般若経の調査を行った際、まさにこの人物が、「大明温州沙門慶載」との名乗りで、応永34年（1427）に筆写した巻を見出すこ

とができています。これもまた、大きな成果であったと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計11件)

井形進、「竈門山寺の最澄造立の檀像薬師」、『市史研究ふくおか』、査読無、13巻、2018年、1-18頁

井形進、「堅粕薬師と東光院の仏像 古代・中世の彫像群を中心に」、『堅粕薬師と東光院の古仏たち』、査読無、2018年、36-44頁

井形進、「久留米に古き巨像を訪ねて」、『西日本文化』、査読無、484巻、2017年、50-53頁

井形進、「英彦山の神像と仏像 かなめとなる古例を中心に」、『霊峰英彦山 神仏と人と自然と』、査読無、2017年、14-23頁

井形進、「霊峰英彦山 神仏のかたち」、『西日本文化』、査読無、483巻、2017年、28-31頁

井形進、「ボチ雑考 慶州古寺調査小報を兼ねて」、『西日本文化』、査読無、482巻、2017年、52-55頁

井形進、「長門三隅の熊野権現社の宋風獅子」、『九州歴史資料館研究論集』、査読有、42巻、2017年、33-50頁

井形進、「金泉寺の不動三尊像と千手観音立像」、『第6回九集山岳霊場遺跡研究会資料集』、査読無、6巻、2016年、24-35頁

井形進、「聖地四王寺山迎歴」、『都府楼』、査読無、47巻、2015年、20-21頁

井形進、「鹿部観音堂の聖観音立像」、『九州歴史資料館研究論集』、査読有、40巻、2015年、33-48頁

井形進、「福岡の神仏の世界 九州北部に華開いた信仰と造形」、『福岡の神仏の世界 九州北部に華開いた信仰と造形』、2014年、5-13頁

〔学会発表〕(計2件)

井形進、「金泉寺の不動三尊像と千手観音立像」、『第6回九集山岳霊場遺跡研究会、2016年8月28日、諫早市中央公民館

井形進、「薩摩塔と宋風獅子」、『国際シンポジウム「中世の福岡平野から見る東アジア 首羅山と造形遺品を中心に」』、2016年7月16日、レスポアール久山

〔図書〕(計5件)

井形進、海鳥社、『九州仏像史入門 福岡平野を中心に』、2018年(予定)、224頁(予定)

井形進、九州歴史資料館、『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究 薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察』、2018年、122頁

井形進、九州歴史資料館、『堅粕薬師と東光院の古仏たち』、2018年、49頁

井形進、九州歴史資料館、『霊峰英彦山神仏と人と自然と』、2017年、180頁

井形進、九州歴史資料館、『福岡の神仏の世界 九州北部に華開いた信仰と造形』、2014年、139頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井形 進 (IGATA SUSUMU)

九州歴史資料館学芸調査室研究員

研究者番号：60543684

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：